



〔仁木町〕

冷水峠森づくりの会

ひやみず



アカエゾマツの大径木林を目指す森づくり

私たちの活動地域は、後志北部・仁木町の山間部です。余市町から赤井川村に抜ける道道36号にある冷水峠(標高350m)周辺の森林で活動しています。かつて家具メーカー「アリスファーム」が拠点置いていた森で、2010年に札幌の社会福祉法人・札幌協働福祉会が建物2棟と4haの森林を取得しました。同福祉会は、障害者福祉事業を営む団体ですが、2011年3月11日に起きた東日本大震災と原発事故の後には、被災地の子どもたちをこの森に受け入れる「保養キャンプ」などの支援活動も行なっています。

きのこや山菜が豊富なこの場所で、交付金を活用して、本格的な森づくりに着手したのは2015年からです。大半は人工林ですが、針広混交林の再生を目指して、広葉樹が育ちやすいよう全域で林床のササを刈り、遊歩道を整備して、自然観察会などを通じて森を身近に感じてもらう活動に取り組んできました。長年放置されていた森がこの6年間で見違えるようになり、人の手が入ることで森の姿が大きく変わるのを目の当たりにした気分です。

4haの森での活動が一区切り着いたところでまわりを見渡すと、同じように荒れ放題の森が広がっているのに気がつきました。森林調査簿をもとに所有者を調べてみると、いずれも道外在住の方たちでした。手紙を出すと、反応があったのは一人だけでしたが、こちらの活動の趣旨をよく理解して「自由に整備してください」とありがたい返事をいただきました。

全面積5.4haのうち、「森林資源利用タイプ」の取り組みをしているカラマツ人工林(1ha)で調査したところ、蓄積量427.3m³と出ましたので、木材利用年数を20年と見込んで、年間搬出量10.68m³の目標を立てました。これまで同様、針広混交林への再転換を目指して、間伐とササ刈りを行なっています。

一方、「環境保全タイプ」の取り組みを選んだ林班(約4.5ha)は、調査簿には「天然林/樹種=広葉樹」と表記されているのですが、実際に現地に入ってみるとエゾマツ(クロエゾマツ)らしき大木が並んでいて、エゾマツが好む北斜面だったこともあり、

「もしかするとエゾマツ天然林では?」と期待が高まりました。ただ、その後の林内現況調査で「アカエゾマツの人工林にエゾマツが混植されたのだろう」と判定されました。その面積は約1haで、苔むした倒木から萌芽が、林床では稚樹の芽生えがみられます。植林されていたアカエゾマツは約350本、いずれも78年生でした。胸高直径は平均で33cm。径40cmを越える大木も4本ありました。北向きの急斜面ですが、ミズナラ、シナノキ、カツラなど資源価値の高い広葉樹もほぼ同じだけ生えている針広混交林だと分かりました。

初年度の作業はカラマツ人工林の間伐とササ刈りが中心でした。間伐材のほとんどは薪にして販売しています。同時に、薪ボイラーの普及を地元自治体などに働きかけていて、これは地球温暖化防止や地産地消の観点から重要な取り組みになると思っています。エネルギーやお金を地域内で循環させれば、雇用創出や林業再生にもつながります。北海道全体で取り組んでいきたいと考えています。

混交林のアカエゾマツは22年後には100年生になります。「樹齢100年の森」が誕生するわけですが、さらなる大径木林を目指して、生育環境を整えていきたいと考えています。広葉樹についても、その育成と持続的利用を図っていきます。将来的には製材や炭焼きなども視野に、資源活用の用途を広げ、地域創成やまちづくりにまでつながるよう、取り組みを発展させていきたいと考えています。



〔報告者〕



富塚 廣 さん